



TITLE:

<批評・紹介>宮澤知之著 宋代中國
の國家と經濟:財政・市場・貨幣

AUTHOR(S):

金子, 泰晴

CITATION:

金子, 泰晴. <批評・紹介>宮澤知之著 宋代中國の國家と經濟:財政・市場・貨幣. 東洋史研究 1999, 58(2): 332-341

ISSUE DATE:

1999-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155246>

RIGHT:

批評・紹介

宮澤知之著

宋代中國の國家と經濟

——財政・市場・貨幣——

金子 泰 晴

宮澤知之氏は若手宋代史研究者として知られ、國家と社會の關係に着目した幅広い研究を展開している。本書は、宮澤氏がここ一〇年餘りにわたって主要なテーマとしてきた宋代の國家財政と流通經濟に關する一連の論考をまとめたものである。元の論文と比較してみると、章によっては加筆修正がなされており、特に第一部第四章では二つの論文をまとめた結果かなりの省略が見られる。また個々の論文發表以後になされた批評については、主に注として取り扱っている（例えば、第一部第一章の注二七・二九、第二部第二章の注一〇、第五章の注三八）。

膨大な研究が蓄積されてきた宋代財政史・社會經濟史だが、本書によって新たな段階を迎えたといっても過言ではないだろう。先に私は、ネットワーク論に關連して宮澤氏の一連の論文を取り上げ、若干の批評を試みたが、本書の刊行はその直後だったため、宮澤氏の全體構想に直接觸れることはできなかった。そこで今回改めて批評を試みることにしたいと思う。まず、全體の構成は次の通りである。

序論 中國貨幣經濟論序説

第一部 宋代の國家と市場

第一章 北宋の財政と貨幣經濟

第二章 北宋の都市市場と國家—市易法

第三章 宋代の商工業者の組織化—行

第四章 宋元時代の牙人と國家の市場政策

第二部 宋代貨幣論

第一章 唐宋時代の短陌と貨幣經濟の特質

第二章 唐宋時代における銅錢の私鑄

第三章 宋代陝西・河東の鐵錢問題

第四章 宋代四川の鐵錢問題

第五章 宋代の價格と市場

終章 貨幣經濟の時期區分

はじめに、各章の内容を紹介する。序論は、本書の總論に當る部分であり、基本概念の定義と基本的觀點及び方法が提示され、以下に展開される議論を先取りして、全體における位置附けがなされている。まず自然經濟・貨幣經濟という基本概念が研究者によって様々な意味で利用されていることを指摘し、その上で中國經濟史における主要な學説を検討する。第一に中國貨幣の一般的特徴について、金銀貨が中心の西洋と異なり、中國では卑金屬である銅を素材とする小額貨幣が一貫して發行され流通し続けていること、それが基本的には國家機關により鑄造され、國家は私鑄を法令により禁止していたことに注目する。小額貨幣でなければならぬのは、人口の大部分を占める小農を對象とするからであるが、その一方農民の自給性は高いレヴェルであったと想定される。従って、小額貨幣の

存在は、從來言われてきたように商品經濟を示すのではなく、個別の人民を徵税という具體的行爲で實現する國家による社會的統合を示していると捉える。また、小額銅錢の基本的な原理は、「素材（重量）原理」や「額面原理」でなく、計數による價值表示・價格表示の方法である「個數原理」であり、その價值を決めるルールは鑄造者の權威・社會的信用によって決定されるので、小額銅錢の場合は、租税として國家が受け取るという國庫通用性により社會的信任を得、それにより流通したと論じる。

第二に貨幣流通と商品流通を同一視し、貨幣數量説を援用して銅錢の流通量の増加から商品經濟の發展を主張する立場の問題點を指摘する。その上で宮澤氏は、前近代中國の流通構造は、都市市場を結節點として、農村市場における商品流通と市場の流通と、國家の財政運営を主因とする全國的物流が對極的な位置を占める二重構造であると捉え、この二つの流通は相互規定的であり、その絡み合いによって中國前近代經濟史は展開したのだが、この問題を検討するには、まずこの二つの異なる流通は區別し、それぞれの發展を見極めた上で總合する手法を取るべきと主張する。また中國貨幣は、この二つの流通を同時に表現するものとして存在したので、貨幣經濟という概念も財政的物流と市場的流通の雙方を含意するものとして設定すべきであり、検討の對象を從來のように流通經濟の側面に限定しないで、國家による社會經濟の統合の手段としての貨幣機能に注目する必要があると主張する。ここから「宋代の經濟を國家の觀點から論じる」という本書の基本姿勢が導き出される。

第一部第一章は、第一部のいわば總論に當たる部分である。以下に見られるように、宮澤氏の議論において中核をなすモデルは、北

宋時代の財政政策であり、本章ではその骨子が提示される。まず、北宋財政統計に典型的に見られる「複合單位（計量單位を異にする品目（貨幣も含める）の數値をそのまま合計して表示するときの「貫石匹兩……」という單位）」の意味を考える。これは交換價值を表示しない不合理な表示とされてきたが、宮澤氏は、各項目ごとの軍事經費の歳收に對する割合が約八五%を占める場合が多いことに注目し、歳收の各現物は軍事經費をにらみながら極めて計畫的に集められたと推論する。そして、交換價值に大きな差がある各品目も、他と代替できない現物として等しく軍事的使用價值を有していることを指摘する。従って、複合單位は軍事的使用價值をもとにして國家財政における物量總額を表現する機能を有するのであり、このような單位を用いる北宋財政は單に量的な意味だけでなく質的な意味でも「軍事財政」であったと結論附ける。

北宋中期の新法期には財政の貨幣化が進んだが、從來この動きは、國家が社會における商品經濟の發達を利用して、專賣收益の擴大と商稅の増收を圖った結果と捉えられてきた。宮澤氏は、見錢收入の増加傾向が兵員數のピークと一致せず、慶曆から嘉祐年間（一〇四一―一〇六三）にかけて一度急減し、治平年間（一〇六四―一〇六七）以後再び上昇していることに注目し、慶曆から嘉祐の落ち込みは商稅の半減、治平以後の上昇は鹽課によるものであり、鹽課と商稅は相反した動きを示していると分析する。そして、商稅收入が商品流通の總量をほぼ正確に反映するものと假定すると、一一世紀半ばにおける急減は、商品經濟の停滞狀況を意味するとする。そこで注目されるのが慶曆八年（一〇四八）に行われた范祥の鹽鈔法改革である。宮澤氏は、この改革によって商人の移動距離が短縮されたこと

などが原因で商稅收入の減少をきたしたと推論する。そして、このように國家の經濟政策の變更が、商人の活動を決定的に制約していることから、宋代の商品流通は軍糧獲得・專賣を核とした國家の財政政策の主導したものであり、社會の自生的な商品流通はわずかにしか展開していなかったと結論附ける。また、專賣制の擴大も生産者と市場を國家が分斷し、生産者自らの計畫による自由な商品化を實現できなくしていることを指摘する。

次に新法期の貨幣財政の内譯を検討し、宋代貨幣の機能は國家に對する納稅支拂手段としての側面が極めて大きく、貨幣は農民と國家の間を往復するだけの部分が大きいとする。また北宋の鑄造總額が約三億貫なのに對して、地方も含めて國庫に收納された見錢は二億數千萬貫に達し、鑄造總額に近い貨幣が國家によつて蓄藏されたままであることから、社會の貨幣流通量は宋初と北宋末でそれほど規模は擴大せず、約三千萬貫程度であつたと論じる。その一方で國家財政による貨幣の歲出入は、宋初の千六百萬貫から新法期の七千三百萬貫へと四倍に擴大しており、宋朝の貨幣發行は、從來言われてきたように貨幣經濟の發達による貨幣需要の増加の結果擴大したのではなく、租稅收取、全國的物流の組織化、國家的富の蓄藏など政治的動機に基づいてなされた結論附ける。

また宮澤氏は、宋代貨幣は、一般的交換手段及び價值保存手段であつたが、價值尺度・價值表示手段としての機能は、後述の短陌の存在などにより限定され、價格が價值法則によつて決まらないものだったとし、このような宋代貨幣が媒介した商品流通が成立し得たのは、國家的支拂手段としての壓倒的な優位性による強力な通用力のためであると論じる。そして、このような貨幣を利用して專賣制

度と手形制度を運營することにより、北宋政權は、社會の自生的ではあるが未だ孤立分散的な商品流通を恆常的組織的な全國的流通に昇華させるのに成功したと論じる。

第二章では北宋中期に實施された王安石の新法の一つである市易法を取り上げる。まず市易法の條文内容を逐一検討し、市易法の本質は、國家機關である市易務が、兼併家から仕入卸賣機能を奪取し、自ら問屋として直接流通機構に割り込み、これを掌握する政策（質遷物資）であり、低利の見錢融資政策である抵當法と結保見錢法は副次的なものであつたと論じる。次に、從來未解明だった「市易三法」の變遷を追つて、當初流通機構の再編のための兼併家に對する抑壓政策の意味が強かつた市易法は、國家機關が商賈に携わる點を批判され、次第に物價安定政策（平準物價）へと轉換していき、その過程で金融政策（抵當法）を分離していったとする。そして市易法の失敗は、從來言われてきたような結保除請法の缺損が問題なのではなく、市易務の流通過程への直接的介入が、當時の社會に形成された流通機構の發達という時代の趨勢と相容れなかつたことが主因であり、市易法は前近代社會の商品流通に對して國家がとつた直接統制の最後の失敗であつたと位置附ける。

第三章では、都市商工業者の組織である行を取り上げる。まず從來の研究においては、行とは何かという共通理解が嚴密には形成されていないことを指摘し、その解明のためには、國家の政策・制度の變遷を押さえ、異なる時期の資料を同時に通用するものとして扱わないことと、行の國家的制度の側面と社會經濟的な存在形態とを分けて考察し、その後で兩者を統一的に理解することが必要であると主張する。

まず國家的制度の側面では、宋初から官の必要物を調達するための行役（下行收買）を負担していた行は、免行法により再編され、行役を廢止する代わりに免行錢を納入する事になったが、その後免行錢は行役免除を伴わない税金と化し、官による行に對する苛斂誅求が復活していったとする。そしてその實態から、行戸を登録した「行籍」はあくまでも行役に服務する者を決めるために官側が作り、商人は自由意思で離脱できない臺帳であり、免行錢も行の市場獨占を公認する代價ではなかったと論じる。

一方民間の同業組織としての側面では、行役に關係しない業種でも行役を行行になぞらえて行と稱している例があり、國家と關わりのない部分も見られる。しかし、行のメンバーシップを定める行籍を官が管理していることから見て、國家との關係が本質的なものであるとする。そして從來民間自生の經濟的獨占團體と見なされてきた側面は、史料上必ずしも明確でないので、行は、本來的に營業獨占や相互扶助を目的とし、すべての同業者の利害を内部規律で調整維持する團體ではなく、國家が商工業者の一部を供應させるために組織したものであり、一般には經濟的獨占は實現していなかったと結論附ける。

また、都市市場の統制方法の變遷について、唐代市制下では、國家が主要な業種の交易の機會を空間的時間的に設定する直接統制を實施し、北宋新法期は、國家機關が商品の流通過程の内部に割り込んで直接的に統制し、南宋では客商と都市商業の結節點に位置する卸賣機構（特に仲買を扱う牙人）の統制を通じて流通過程を間接的に統制したと論じる。そして、行の市場獨占がない宋代都市市場は、國家の財政的物流編成と一體に施行された市場的流通に對する

直接的・間接的統制下での「自由競争」の場であったと結論附ける。

第四章では、客商と坐賣の間を取り持つ牙人を取り上げる。まず牙人の機能は、賣買當事者を相互に斡旋して手数料を取る周旋機能と、自分自身も商行爲の當事者になる仲買機能に分け、唐宋間の商品流通の擴大により、從來の市制のような流通機構だけでは農村から都市へ流入する農業生産物を處理しきれなかったことが、牙人の機能を周旋機能から仲買機能へと擴大させたとする。

牙人の仲買は、五代宋初には經濟を混亂させるとして禁令の對象となったりしたが、北宋中期以降は、統制・活用する方向に轉換し、邸店の配下にいた牙人を切り離して經濟官廳に登用する政策などが行われた。南宋では地方官が放任・利用することが多くなるが、その結果牙人による仲介獨占が可能となり、市場を支配し國家の統制を越えてしまう事態も發生した。元朝は、北方の大都を中心とする根據地の經濟を維持するため、江南からの遠距離物流の安定を第一義に圖り、その方策として流通の主體を客商に求め、商税を優遇したほか、牙人の機能を立契を要する不動産・主要動産賣買の周旋に限定しようとした。しかしこの政策は宋以降の仲買卸賣機構の成長という市場的流通發展の歴史的趨勢を無視したものであったため、元朝はかえって市場把握力を低下させ、元末には牙人の仲買機能が一層發展した。明代になると、はじめて牙人の仲買が公的に認められ、牙帖定額制度により國家が管理することになったと論じる。またこの章では、「官牙」「私牙」の意味の宋明間における變化に關し興味深い議論が展開されている。

第二部では、第一部で浮き彫りにした諸相を貨幣自體の性格に即

して検討していく。第一章では、百個未滿の錢を百文として行使する短陌慣行について考察する。宮澤氏は、短陌の發生原因に關する通説を批判し、それを解く方法として、まずは短陌の名目一陌文と實際の銅錢個數との間に、何らかの價值關係を想定せず、名目一陌文をあくまで銅錢計數上の位取り單位と捉えること、公定の短陌制度である「省陌」と社會の短陌慣行を分けて考えること、唐宋期の短陌が持っている固有の歴史性を追求することを提起し、以下の如く論ずる。

まず短陌の計數方法は二種類あり、第一は「短陌比例定數方式」

であり、國家の會計帳簿で用いられた。これは短陌を比例定數として用い、多様な陌を省陌（七七陌）に統一するものである。この換算は端數を切り上げるため完全な比例關係にはならないが、財政のように大規模な場合は誤差を無視できる。これにより宋朝は財政を統一的に運営する基礎を持つこととなった。第二は「短陌進法方式」であり、國家と社會の間での財貨の移動と交換、及び社會内部の商品經濟で使用された。具體的には、租税の徴収や銅錢と紙幣の交換レート、市場での賣買などがそれに當たる。これは陌をそれぞれの進法の位取りに用い、それによって表示される貫文は、百の位以上は陌の個數を表し、十の位以下は陌で割った餘りの銅錢の個數を表すものである。

商品流通における短陌の場合は、業種商品別に異なる短陌が用いられ、當時の人々も陌の相違を貨幣の種類の相違のごとく意識していた。それは商業の種類によって異なる「貨幣」が通用していたことを意味する。このことと、短陌による商品價格の表示が商品の交換價值を正しく表現する事ができないことは、當時の商品の生産流

通が未だ孤立分散的であり社會的分業も非統一であつて、市場内部に統一の契機が未成立であつたことを示している。しかし國家財政による經濟の規制力が強力であり、銅錢の社會的信用が大きかったため、國家發行の銅錢に對し獨自の計數單位を設定することで統一が圖られることになったと論じる。

第二章では、國家發行の貨幣の信用を脅かす私鑄錢の發生狀況に注目し、唐宋期の貨幣經濟のあり方の違いを比較する。ここでいう私鑄錢は、品位・形狀が官錢と變わらない好錢と品質が劣る惡錢の兩方を包含している。

まず私鑄の採算を調べるために官による實際の鑄造狀況を調べると、本錢（生産費）＋息錢（純利益）＝歲鑄額（鑄造總額）という關係が出てくる。更に本錢の内譯については、廣義では原料費、工匠勞賃、官吏の俸給、運搬費に分かれるが、官吏の俸給と運搬費については記載がないことが多いので、單に本錢とある場合は狹義に考へてそれらを除外する。また本錢と鑄造額しか記載されていない場合は、國家が純利益のマイナスとなる損失經營を維持し續けるとは考えられないので、鑄造額は全て息錢を表していると假定する。そのように考えると、當時の人々は、現代と異なり、社會的リスクの大きさを勘案して、プラスの息錢があつても、採算率（息錢÷本錢）が一〇〇%を割ると採算が合わないと考えていたと論じる。

次に唐宋の私鑄錢の變遷を追い、以下の如く論じる。まず唐代はほとんど全ての期間に私鑄錢が横行しており、唐の禁令もほとんど効果がなかった。特に八世紀後半の稅財政改革の影響で見錢收入が急激に増加したことは、八世紀末に急激な銅錢不足と銅價急騰をもたらし、その結果、好錢を私鑄する事が不可能となり、唐後半期は

惡錢の私鑄が激しくなる。しかし惡錢は國庫には通用しないことから、この時期に、國家との貨幣支拂關係で通用する貨幣と、社會内部で通用する貨幣とが機能分化したと考えられる。唐代には造幣權が國家のみに歸屬するという觀念がまだ確立しておらず、五代も基本的に唐後半期の狀況が續いたとする。宋代も私鑄錢が盛んに作られたが、全體的に見て好錢の私鑄は、銅禁の勵行により銅價が高騰したため抑制され、惡錢の私鑄も、大量に鑄造された官錢に比べれば流通額ははるかに少なく、惡錢を國庫に通用させないことにより基本的に小平錢の私鑄を排除するのに成功したとする。宋代には國家の造幣權が確立され、國家と社會の間の貨幣流通と社會内部の貨幣流通が二元化せず、官錢による一元化が徐々に進行したと論じる。

第三章では、銅錢と鐵錢の比價に注目しつつ北宋陝西・河東での鐵錢發行の経緯を整理する。この二つの地域は北宋の沿邊に当たり、銅錢と鐵錢が兼用された地分であった。そのため陝西では、西夏戰の軍費調達に關係して、當十大鐵錢、當十大銅錢、小鐵錢、小銅錢の四種類の貨幣が併用されることとなり、その銅鐵の價格差から私鑄錢が大量に發生した。その上短期間に大鐵錢の價値と銅鐵錢の比價が變更されたことは經濟を更に混亂させたとする。

またこの章では、北宋末の蔡京による夾錫錢の發行について、生産の減少した銅錢に代わって全國的流通を擔う貨幣を創出しようとした試みであり、南宋の會子を経て元の交鈔へ至る道を開いたものと評價する議論が展開されており注目に値する。

一方河東の鐵錢は、もともと陝西との關係で補助的に發行されたものであり、當地の通貨全體に對する比重は餘り大きくなく、むしろ

る銅錢専用地域に近い狀況であったと論じる。

このように鐵錢は、銅錢不足を補うため發行されたが、銅鐵の價格差を無視して銅錢と鐵錢を等價で通用させようとしたことと、鐵錢は通用地域が限定された地方通貨であるために社會的信用が低かったことなどが原因で私鑄を引き起こし、結果的には宋朝の銅錢による統一的な貨幣體系を崩し社會統合を阻害する不安定要素となつたと論じる。

また宮澤氏は、銅錢と鐵錢の公定比價は、銅鐵の價格差にもかかわらずおおむね一對一が堅持されていることに注目し、これは、公定比價が銅鐵錢の需給關係や金屬素材の價値に規定されず、國家により權力的に任意に設定されたことを示し、むしろ民間比價の方が公定比價に制約されていたと結論附ける。

第四章では、北宋四川の鐵錢の諸問題を銅鐵錢の比價の變化を中心として検討する。まず民間比價については、宋初からの鐵錢化政策、王小波・李順の亂、北宋末の陝西からの鐵錢の流入などの影響を受けて、一對二・五から一對一四まで上昇・下降を繰り返し、やがて銅錢が枯渇すると消滅したとする。そして民間比價は、通説とは異なり四川でも公定比價に誘導されており、流通量の割合ではなく二種の通貨の國庫通用力の強弱により定まったと論ずる。一方公定比價については従来一つと考えられてきたが、民田税は一對一、計贓は一對二、路外帶出は一對一〇というように、行財政の各部門によって異なる値が政策的に決定されていたことを指摘する。そして、一一世紀以後、四川の通貨制度が安定したのは、四川地域を全國の銅錢地域から遮斷し銅錢を流通させなくしたためであり、四川では鐵錢が他路における銅錢の役割を果たしたと論じる。

第五章では、宋代の價格變動と地域差を分析し、宋代の價格の特徴を論じる。まず價格の長期的變動については、軍事的緊張が高まったときの急激な上昇以外は北宋ではほとんど變動が見られず、南宋でもごくわずかずつ上昇したに過ぎないことを明らかにする。そして、この動きには人口増や貨幣流通量よりも、軍需による需給關係の變動が壓倒的に大きな影響を與えていると指摘し、對外關係の比較的安定した時期は、軍事費捻出のため信用の劣る貨幣を發行する必要がなかったため、國家による貨幣の信用維持政策によって價格も安定したと論じる。

次に季節と豐作凶作による短期的變動については、地主による市場支配や官による和糶・兩稅徵收が大きな影響を與えていること、比較的小範圍での市況情報が不足し、商人が自主的に利益獲得に動けないことなどに注目し、これらの事態は、地方における卸賣組織の未發達、農村市場の孤立性、商人組織の未熟性を示していると論じる。

そして宋代の價格の特徴は、財政レヴェルの價格體系と民間市場レヴェルの價格體系が異なり、時估（官が財政運用のために一〇日毎に定める三等の價格）と市價、虛估（軍糧補給を圓滑にするため政府が高めに定めた糧價）と實估、公定比價と民間比價、省陌と短陌などの二元的システムに分かれていることであり、財政レヴェルの價格體系がかなり成功したのに對して、民間市場の方は未熟であり必ずしも有効に働かなかつたと論じる。

また、財政レヴェルの市場は民間市場の積み重ねで形成されておらず、その間には次元的な飛躍があり、それを成功させたのが全國に劃一的に通用する銅錢の存在と、前述の財政レヴェルの名目的な

價格の意識的な採用であるとする。ところがこのような價格體系は時代を下るに従って次第に崩れ、南宋末には、銅錢建て價格、名目的價格の維持、異種貨幣等價という三つの財政原則の轉換を餘儀なくされて、社會經濟に對する統合力を失い異常な物價騰貴を招くことになったと結論附ける。

終章は、唐代から明代までの貨幣經濟の展開について時代區分を試みる。そして宮澤氏は、唐宋變革期以後の貨幣經濟の特徴として、國家とりわけ中央政府の造幣權の確立、貨幣發行額の飛躍的増加による統一的計畫的な財政的物流の成立、私鑄錢の排除による貨幣の二元的流通の解消（官錢による統一）、國家と社會の關係を媒介するものとしての貨幣の役割の強化を挙げ、これらによって北邊防備の軍糧補給と政治的中心である國都の維持を達成するとともに、廣大な領域内における經濟的發展の不均衡を調整しながら社會を統一的に統治することが可能となったが、それが典型的に達成されたのが北宋であり、以後南宋・金・元も統一的貨幣を媒介手段とする財政運用を踏襲したと論じる。

その後一六世紀半ばに國家財政が銀財政に轉換し、國家の統制のきかない銀が中國の主要貨幣となったことで、國家發行の貨幣が財政運用を通じて社會經濟を統合する、秦漢以來の傳統的な貨幣體系が最終的に解體し、個數原理・額面原理の貨幣である北宋の銅錢・元の交鈔から素材原理の貨幣である明中期以後の銀への轉化がおこなわれたと論じる。そして、このように見ると、宋代は、唐宋變革期における量的擴大で前後に二分される單純商品經濟の段階に當たり、前近代中國における貨幣の持つ意義の轉換點は、量的な擴大である宋代よりも質的な變化が起きた明代にあると結論附ける。また

この他、紙幣に關して示唆に富む指摘があるが、残念ながら紙數の關係で省略せざるを得ない。

以上見てきたように、本書は宋代の流通經濟に對する見方を大きく變える意義深い内容となっている。第一に、從來「唐宋變革論」のもとで定説化していた宋代の飛躍的な經濟發展—貨幣經濟の發達、全國的市場の形成、都市市場における行の自律的形成とそれによる市場獨占等—に對して疑義を挟み、宋代の流通經濟における國家の役割を重視したことである。特に、①國家により財政的に組織された全國的物流システムが、いまだ孤立分散的な社會的流通をつなげる役割を果たしたこと、②貨幣の第一義的な機能は國家的支拂手段であり、そのことによつて貨幣の社會的信用が高まり、國家による社會的統合において大きな役割を果たしたこと、③行は本來的には國家が組織したものであり、都市市場は國家の統制下での「自由競争」の場であつたことなどの指摘は、新しい宋代商業流通モデルを構築する上で重要な検討課題となるだろう。

第二に、このような宋代の流通經濟に對する見方の轉換は、唐宋變革論の經濟的側面と中國貨幣史の捉え方に大幅な見直しを迫ることになる。例えば、農村市場の孤立分散性についての指摘は、他時代における農村市場の實態や役割について再検討を促し、貨幣の財政的物流における機能への注目⁽³⁾は、古代秦漢帝國をはじめとする「貨幣經濟」に對する見方を變え、行の性格に關する議論は、唐代市制下の行の實態や市外の店舗に對する統制の有効性などへの再検討を促すことになる。

第三に、宮澤氏は、複合單位や短陌慣行などの現代人には不合理に見える宋代の慣習に注目し、史料の再検討を通して當時の人々の

考え方の復元に努力し、それらの慣習の持つ意義を明らかにしようとしている。財政史や貨幣史のようにタイムスパンが長い對象を扱う研究において、社會史的な手法を取り入れ、理論に走らず史料に則するこのような手法は評價されるべきであらう。

最後に、本書に關していささか氣になった點をいくつか指摘したい。まず構成面について、本書を讀んでいて少々困惑したのは、結論部分と論證部分が入り交じりながら展開していることである。例えば、序論ではこれから論證する内容が確定的に論じられており、第一部第一章の緒言では、いきなり國家と市場の關係についての結論が提示され、その後で諸論證がなされている。これは恐らく、本書を構成する諸論文の發表時期が、目次の順番と異なるためだと思われる。また、各章によつて結論のニュアンスが微妙に異なり、結論の意味合いにかなりの幅が見られる。本にまとめる段階で、もう一工夫して頂けたら読みやすくなったのではないだろうか。

次に論證面について、まず第一部第一章では、商稅統計の検討により、國家の經濟政策の變更が、商人の活動を決定的に制約している⁽⁴⁾と論じる。確かに鹽鈔法の改革によつて商人が沿邊に納入するものが軍糧から見錢に變わり、商人は開封を經由せず直接鹽產地の解州に赴くこととなった。しかし、この改革の影響で商人の移動距離が短くなり商稅が減少するという相關關係は本當に成り立つのだろうか。注意しなければならないのは、沿邊で最も必要なのは軍糧であることに變わりはないことである。自給率が低い沿邊において見錢で軍糧を調達しようとすれば、結局は土着商人を含めた商人から買うしかないのではないかとすると、商人は相變わらず動いていくことになる。沿邊での流通構造説明が必要であらう。更に第一部

第二章では、その商税減少の理由として國都の兼併家の支配を擧げており、二説の關係についての説明が必要であらう（一二二頁）。

次に貨幣鑄造額の大部分は國家によって貯藏されるか農民との間を循環するだけで、社會内の市場的流通で使われた部分は宋初と北宋末でほとんど變わらなかつたという説についても、簡単な概算し⁽⁵⁾か示されていないので、更なる検討が欲しいところである。

また、これらの議論の前提として、農村への貨幣の浸透度を低く見積もり、農民の自給性を高く評價するが（一六、五八、六七頁）、その根據については若干の史料を擧げるのみである。この問題については、中國における貨幣の浸透度を高く見積る説も存在するの⁽⁴⁾で、もっと慎重に取扱うべきではないだろうか。

第二部第二章では、惡錢は國庫に通用しなかつたとされているが、南宋の砂毛錢（砂を混入した惡錢）の場合は官への納入にも用いられたとしている（三四七頁）。これは官錢と混ぜて糴にまとも⁽⁵⁾できなかつたためとされる。とすると、惡錢に國庫通用力がないために社會内部で通用する通貨となり、貨幣流通の二元化が起きたという議論は再検討の餘地があり、また貨幣流通量において惡錢を考慮する必要が出てくるのではないだろうか。

第二部では、宋代貨幣の第一義的な機能は國家的支拂手段であり、國家に對する信頼が流通力の源であるとする議論が繰返し展開されている。このような議論は從來から根強いものではあるが、近年の研究では否定的な見方が多い。確かに國家の影響力は大きい⁽⁵⁾が、素材價值から餘りに乖離した大錢が盡く失敗したように萬能ではない。民間市場の價格體系がどのようにして形成されていくの

か、更なる検討が必要であらう。

第二部第二章の鑄造額＝息錢という假定は、國家が損失經營を續けるはずはないという考えからでているが、むしろ、國家だからこそ採算度外視で損失がでても續けるとも考えられよう。このように本書の議論は魅力的ではあるが今後一層の深化が必要とされるであらう。ところが近年この宮澤氏の議論を安易に引用し、國家の統制力の強さを強調する議論をままた見かける。議論を當てはめて足しれりとするのでなく、個々の事例における徹底的な論證がとめられていると言えらるだろう。

手法的な面について、本書は、國家的物流と市場的流通を次元が異なるものとして區別する事で、從來明確にできなかった特徴を明らかにしようとしている。しかし、氏も述べている、その次にこの二つを總合的に考察することに關しては、今後の課題として残つたといえるであらう。二分法的な手法が最後まで残り、一貫して國家の側から見た宋代社會經濟像を形成している。そのため民間流通の動きは、一般に未發達、未成熟なものとして扱われる傾向が見られる。また政府の統制に服さず、財政政策を破壊するような過激な動きこそ民間のエネルギーの現れのはずであるが、それらも例外として除外されるか、擾亂要因としてマイナスの評価を與えられてしまっている。これらの動きをも把握するためには、氏自身も言及しているような政府と民間の相互作用、というより國家と農民とその間に介在する商人が關連して流動する社會像、特に地域經濟の場におけるその構築を目指す必要があるだろう。

それにしても本書を読んで痛感したのは、中國前近代の流通經濟を論じるために使用できる理論・語彙が不足していることである。

宮澤氏も宋代の特性を抽出しようと勉めているのだが、それを表現しようとしたとき、西洋資本主義経済への單系發展的な経済理論における理論・用語を使わざるを得ない。それによって他地域・他時代との比較は可能になるが、せっかく抽出した生の素材が色あせてしまうのは残念なことである。以上魅力的な議論に觸發されて、つい獨斷的感想を陳ねてしまった。著者の御寛恕を乞い願う。史料の側から積極的に理論・語彙の構築を目指すことを自らも今後の課題としつつ筆を擱きたい。

註

(1) 拙稿「宋代流通史におけるネットワーク論の效用」(『宋代

社會のネットワーク』汲古書院、一九九八年)。

(2) 例えば、佐原康夫「中國古代の貨幣經濟と社會」(『岩波講座世界歴史』三、岩波書店、一九九八年)を参照。

(3) 例えば、妹尾達彦「都市の生活と文化」(『魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院、一九九七年)を参照。

(4) 例えば、黒田明伸「貨幣が語る諸システムの興亡」(『岩波講座世界歴史』十五、岩波書店、一九九九年)を参照。

(5) 註(4)黒田論文を参照。

一九九八年三月 東京 創文社
A5判 五二六＋一八頁 一二〇〇〇圓